



セヴラック通信

Courrier de Séverac

第13号

後期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

19

第 19 回例会
2012 年 12 月 9 日(日)
衍芸館

プログラム

例会

18 : 30-19:40

【演奏とお話】

末吉保雄

セヴラック：歌劇《風車の心》について その 7

鎌田直純 (Bar) ・ 森田学 (Bar) ・ 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：歌劇《風車の心》第 2 幕第 2 場より

Déodat de Séverac : Extrait de "Le coeur du Moulin" Acte 2, Scène 2, Poème de M. Magare

～休憩～

【演奏】

館野 泉 (Pf)

平野一郎：微笑ノ樹～円空ニ倣ヘル十一面～

Ichiro Hirano:HOHOEMI NO KI -11 Faces after Enkû- for (Left-Hand) Piano

懇親会

20 : 00 ～

歌劇《風車の心》について (4) ●末吉保雄	5
〈連載〉セヴラック随想 (4) ●濱田滋郎	8
〈連載〉セヴラックと私 ●久保春代	12
第18回例会の報告 ●鎌田和夫	14
第19回例会プログラム	1

オペラ
歌劇《風車の心》について (4)

第 18 回例会のお話より

末吉保雄

セヴラックのオペラは2つあります。1つは劇場用のオペラ。それが今勉強している《風車の心》です。もう1つは大規模な野外劇としてのオペラ《エリオガバール》。ギリシャの題材をもとにして、野外劇場用に作りなおしたのですが、地元のブラスバンドとか、セヴラックの住んでいた場所の周辺地域の音楽家たちが参加できるような仕掛けになっているもので、かなり一般のオペラとは違ってしています。

《風車の心》の着想は1903年ころからですが、完成して初演されたのは1909年12月8日オペラコミック座でした。モーリス・マーグルという、『ペレアスとメリザンド』の作者メーテルランクの仲間で、ブリュッセルのベルギー象徴派の文学者の1人として重要な人物ですが、そのマーグルのテキストをもとに、セヴラックは、自分の出身地への思いやその周辺の風土への音楽的なイメージを温めながら、2幕のオペラにしました。セヴラック協会では、2009年にこのオペラの初演100年を記念して勉強してみよう、ということで、鎌田直純さんと森朱美さんと2人に演奏して頂いて少しずつ読み進めてきています。

オペラの場面を簡単に申し上げます。みなさんは、ステージを見ているとお考えください。

ここはセヴラックが住んでいる村サン＝フェリクスあたり。今はサン＝フェリクス・ド・ロラゲと言われていますが、当時の地名サン＝フェリクス・カラマン近くからピレネーをはるかに見渡すようなところ。舞台の向こうに背景として山々のシルエットがうっすらと描かれ、その手前にずうっと丘陵地帯が下がってきて葡萄畑が広がっています。今は、館野さんが書いておられるように「ひまわりの海」が一面に広がっています。ちょうど今頃（6月）行くと、まさしくひまわりの海で、少し濃い緑があるところに葡萄の畑が伸びている。今から100年前、200年前も景色はあまり変わらなかっただろうと思いますが、想定されているのは18世紀。いつに変わらない、そのような村のひとつの出来事としてセヴラックは書いています。

ここは、村から少し上がって遠くが見渡せる場所で、ここを歩いて葡萄畑に降りていくところでもあります。ちょっと小高くなっているのも、上手には昔からある大きな風車小屋がある。ドーデの風車小屋などを絵で想像して頂くとよいでしょう。但し大きさはもう少し小さいので、裸山にそびえ立っているドーデのようなものではなく、周りには葡萄畑が続いています。ここをつたって上手にずっと行くと、村を出て遠くへとつながっています。下手側は、道が村から上がってきているところ。ここから人々は上手や下手に分かれ、さらに葡萄畑に入っていく。そのような、村に降りていく小高い場所だとお考えください。

この周りに大きな井戸が空いています。この空井戸は、昔掘った鉾山の跡ですけれども、風でその深い井戸からヒューヒューと妙な音がします。その音によって主人公が昔の声を、

自然の声を思い出す。じつはそこにコーラスがからむという仕掛けがあります。声の立体的な使い方、と表現した人がいましたが、ここではその仕掛けを聴いていただくことができないのが残念です。

ある意味でオーソドックスなオペラコミックの劇場オペラなので、場所はそこから変わりません。場面は朝早くから始まり昼を過ぎて、今日演奏する第2幕の始めは夕方、少し薄暗くなりかけているところ。だんだん暗くなってフクロウの鳴いている声が聞こえたりする。こういう時間経過です。

この村に住むマリーという女性がいます。マリーは働き者で、今はピエールという夫と暮らしていますが、ある朝ひじょうに不安なニュースで心をかきむしられることとなります。彼女には、昔、愛し合い、将来を言い交わしたジャックという男がいました。当時ジャックはお金がなく手に職もない。そこで遠くに出て、必ず働いて暮らせるようになって帰ってくるから、と言って村を出ていった。そのジャックが帰ってきているらしい、ジャックの姿を見たという噂をマリーは聞きます。

9月の下旬のこの日は葡萄の採り入れの時で、大勢の村人がこぞって来ている。夜は葡萄の収穫を祝って、一年に一回の大きなお祭りをしようとする気分は高まっています。朝から人々は、バスケットにサンドイッチなどをいれたお昼をもって畑に出ていく。その早朝に、友だちから話を聞いた。ずっと便りがなかったジャックの姿を見た、噂で聞いてはいてもまだ誰も本当には見てはいない。第1幕はそこから始まっています。

物語は、実際にジャックが村に戻ってきて、マリーと久しぶりに再開します。そこは、互いに名を呼び合って高揚していく場面です。

しかしマリーにはすでにピエールという夫がいる。1幕の最後にピエールが葡萄摘みの男たちのいっしょに登場し、なんてマリーは素晴らしいだろう、自分にとっては人生そのもので、マリーほど世界中で愛している者はいない、と歌います。ここでマリーは、今の夫であるピエールがひじょうに誠実に自分を愛してくれているにもかかわらず、何年ぶりかで見たジャックに、自分が変わらず、いや前以上に強い思慕の念を持っていることを確認する。自分がいちばん愛しているのはジャックだと思う。マリーの心はひじょうに大きく動き始めます。

さて、もうひとつの主役は風車です。風車は、それを回して粉を挽くわけで、粉挽きの男がいる。年を取った男で、小屋の中において、小屋の前を通り過ぎる村人たちがいろいろな話をするのを耳にし、あたかも番をしているような役割になります。

第1幕の終わりは、マリーがひじょうに困っている場面です。ピエールの純真人柄が強調され、一方のジャックは久しぶりに帰ってきた故郷の美しさを思い、自分が村を出ていった時の情景を思い出します。葡萄の取り入れ時で、マリーは変わらず美しく、別れる時に、アンジェラスの鐘つまりお告げの鐘が聞こえてきていた。教会に守られてきたこの村の日々を、本当に自分の大事なものとして思い出していく。

第1幕は、こういったものの対立が確認されたところで終わります。

今日これから演奏する第2幕は同じ場所ですが、もうすっかり夕方になって薄暗くなっています。葡萄を摘み終わった人たちが大勢、風車小屋の前に出てきて、祭りの最初の催し「葡萄棚の踊り」を踊ることになります。会員の山根さんが「葡萄棚の踊り」の連弾譜を持っておられたので、この部分は今日は久保春代さんとの連弾でご紹介します。ただ、お聞きいただく音としてはピアノ・スコアとほとんど変わりはありません。少しテンポの遅いところは、村人たちが入ってきて、そしてまた出ていくところ。音楽が若干行進曲風になっています。中間部分は、少しテンポの速い、踊りにふさわしい音楽です。そこを続けて演奏します。

その踊りが終わって人々が去っていったあとに、マリーがジャックに会いたいとやってくる。風車小屋のあたりにいるはずだと。しかしジャックの姿は見えません。そこに年取った粉挽きが風車小屋から出てくる。彼からみれば、こともあろうにピエールではなくてジャックを呼ぶマリーが来た。そういうところが今日の場面になります。

(構成：亀田正俊)

〈連載〉セヴラック随想 (4)

濱田滋郎

去る12月1日、抱いていた夢のひとつが叶った。その日の午後、すみだトリフォニー・ホールで催されたピアノ・リサイタルで、87歳を数える名匠アルド・チッコリーニからセヴラックの作品を聴けたのである。たしか先々号の当機関誌に私は記したと憶えている——「老境に入ってから、以前からの完璧なピアノイズムに加えて人間的な心の綾“譜面には書けぬ詩情の領域”をこそ弾き表わすようになった、こんにちのチッコリーニからこそセヴラックを聴きたい」という意味のことを。その願いが、思いがけない早さで、実現したわけなのである。会場では当協会の方がたと何人もお会いしたことだし、私と同じ思いでいられる方がたも多いと思う。したがって蛇足かもしれないが、後日の覚えのためにも、当日チッコリーニの弾いたセヴラックの曲目を記しておきたい。なお、当日、名匠はプログラムの前半をセヴラック作品、後半にはドビュッシー《前奏曲集》第1巻を弾いた（これまた長く忘れ得ぬであろう名演であった）。

第1部——デオダ・ド・セヴラック作品集

- ① 〈春の墓地のひと隅〉～組曲《ラングドックにて》より
- ② 《休暇の日々から》第1集
- ③ 〈リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ引きたち〉～組曲《セルダーニャ》より
- ④ 《ペパーミント・ジェット》（演奏会用の華麗なワルツ）

——以上すべては期待したとおりの名演と言えたが、やはり最も深々と胸を打たれたのは、③であったと思う。第1部はこの曲の引く余韻のままに終って欲しい気もしたが、もう1曲、華麗なワルツを鮮やかに弾き上げてひとしおの健在ぶりを示した老名匠なのだから、それはそれでよかつただろう。

ところで、その感動的だった〈リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ引きたち〉が、当連載の前回、途中まで書いていた《セルダーニャ》の、ちょうど次の曲に当たっている、というのもまた、なにか良すぎるタイミングではある。

セヴラックがブランシュ・セルヴァ宛に送った手紙から判明するところでは、この第4曲〈リヴィアの…〉を、セヴラックは先に仕上げていた第3曲（〈村のヴァイオリン弾きと落穂拾いの女たち〉と終曲〈ラバ引きたちの帰還〉とのあいだに、あとで書いて挿入したらしい。くだんの手紙の文面によれば、《セルダーニャ》の原形（4曲より成る）を試

奏したセルヴァは、終りの2曲（上記の2曲）のあいだに、もうひとつゆったりとしたテンポの曲を置いたほうがいい、そのほうが効果的だと思う、と、作曲家に進言したらしい。セヴラックはそれを受け入れ、〈コンプラント（哀歌）〉とも副題される、ゆるやかな祈りの調べをそこへ挿入することにした。そのときセヴラックの胸中に浮かんだのは、住まいから遠くない村リヴィアの教会にある、かねて彼がお気に入りの聖十字架像であった。それは、やはり近郊のベルピニャンにある、恐ろしいまでのスペイン的リアリズムをもって作られた聖十字架像とは違って、同様にキリストの苦難を扱っても、より穏やかな神秘感を讃えたものであった。このキリスト像と、その前に祈りを捧げる、日灼けした牧人たちの姿をイメージして、セヴラックはこの〈哀歌〉を書いたのである。

この曲の解題は、音楽之友社刊「セヴラック ピアノ作品集3」の解説ページで、館野泉さんが懇切に記しておられ、私からここに追記すべきことは何も無い。ただ、ひとつ指摘しておきたいのは、この曲のうちに、彼がおそらくアルベニスとの親交から得たであろうものが、それとなく反映していることである。アダジェットのテンポ指定、コン・ドローレ（悲しみをもって）の指示をもつこの曲の序奏部は変口短調で始まるが、3小節目の終りで主音（変口）の上のハ音に♭がつき、それは5小節目で繰返される。この変化により、この序の旋律は、変口短調というよりは、変口を主音とするフリギア旋法（ミの旋法）の趣をおびるのだ。スペインの民俗音楽（フラメンコをはじめとして）にきわめて多く見られるこの「ミの旋法」は、アルベニスそしてファリヤ、トゥリーナなどスペイン民族主義音楽の旗手たちが、自国固有の味わいを醸し出すために、競って用いたものである。「スペインの流儀による聖十字架像」を念頭においたセヴラックは、おのずと、かねがねアルベニス作品との触れ合いから心にあつたに違いない、スペイン風な「ミの旋法」をここに用いたのである。「ミの旋法」独特の味わいについて、識者たちは言う——「なにか抑えられた情熱の感じ、やるせない孤独感、寂しさの感じ」だと。聖十字架像を前にした牧人たちの感情を表わすのに、この旋法を用いたいという思いは、セヴラックの内のごく自然に湧き出たのに違いない。

以下、この曲の内では、牧人たちの悲しみの情と、天を指して昇っていく彼らの熱い祈りの旋律とが、こもごもに入りまじる。そして、鐘のひびきが、この世ならぬ美しさでそれらを彩る。あらためて譜面を眺めても、なんと素晴らしく書かれたページなのだろうと讃嘆するほかない。

そして組曲（ないし「5つの絵画的習作」）《セルダーニャ》の素晴らしさは、〈哀歌〉の深い感動ののちに、軽妙さのうちにペーススを漂わせた、素敵な終曲が待ち受けているところにもある。〈ラバ引きたちの帰還〉、あるいは〈ラバ引きたちの帰り路〉。ラバというのは、南欧に多い家畜で、馬とロバとをかけ合わせて作る人工的な生き物である。丈夫なので、荷役や畑仕事に重宝される。そのラバ（フランス語で mule、それを扱う農夫や牧人のことを muletier という）を引いて、村人たちが家路をたどる。夕映えがしているかもしれない、どこかうら寂しくもあるセルダーニャの夕暮である。変ト長調、16分



館野 泉 (pf)
WPCS-11028/9
(フィンランディア/ワーナーミュージック)



ジャン＝ジョエル・バルビエ (pf)
465814 (Accord)

の12拍子で書かれているが、これは3連音を一貫させた4拍子、というふうにとったほうが取りやすい。トン、トン、トン、トン…と一律に刻まれる音符が、ラバの足音なのだが、同時にそれは大地の囁きでもある。右手のこまやかでリズムカルな動きは、ラバ引きが一日のできごとをちらほらと思いつくのか、あるいは吹く風の戯れか。やがて、ラバ引きの唇から、懐かしげな土地の調べも漏れてくる……。ともかくもこの終曲は、セヴラックがセルダーニヤの土地と人に寄せる心からの親愛の調べで、やがて遠ざかり微かに消えてゆくまで、聴きての胸に懐かしさの灯をともしつづける。

さて、《セルダーニヤ》をCDで聴くには誰の演奏で選べばよいか。まずは館野泉。言うまでもなく当協会顧問として席を共にし、いつも身近にいる方なので却って挙げにくい面もあるのだが、CDの入手しやすさも勘考すれば、文句なく館野盤（フィンランディア／ワーナーミュージック WPCS-11028/9）である。「ひまわりの海～セヴラック：ピアノ作品集」と題された2001年の録音。この盤はおそらく当協会員なら愛蔵されておいで思うので改めご紹介の要もないが、《セルダーニヤ》のみならずすべての曲目にわたって、譜面からセヴラックの意図をよく読み取り、美しく表現した演奏がつづく。

次に挙げたい《セルダーニヤ》全曲盤は、前にも言及したとおり、忘れ難いピアニスト、ジャン＝ジョエル・バルビエのものである。彼が旧BAM (Boite à musique) 社に入れたLPはCD期になってから何度か復刻されているが、ここには仏・アコール (Accord) 社のそれ (LC00280) を挙げておきたい。《セルダーニヤ》(1970年録音)と《ラングドックにて》の抜粋 (1980年録音)が入っているが、何ともいえずノスタルジックな雰囲気を持つ、忘れられない演奏である。

《セルダーニヤ》中の個々の作品では、これまた懐かしい名前のマグダ・タリアフェロが「フランス・ピアノ名曲選」といった彼女の名盤の中で〈ラバ引きたちの帰還〉を弾いていたのを思い出すが、あの仏Erato盤 (もとLP、CD復刻も確かあった) は今、入手可能——外盤でも——なのだろうか (註：2012年現在、タワーレコードより限定発売中)。

同じく〈ラバ引きたちの帰還〉を聴ける盤でいま私の手元にあるのは、往年のフランスを代表したピアニストの一人ロベール・カサドジュ (1899-1972) の演奏を収めた1枚の復刻CD (The Classic Collector AD070) で、ラヴェル、フォーレ、ドビュッシー、シャブリエ、カプレなどフランス作曲家の佳篇を集めたものの内に聴かれる。録音年は1935年とあり、昔、少年の私がラジオから流れるのを聴いたのは、これだったかも知れないと思う。

同じく古いSP盤からの復刻で、ぜひ挙げておきたいものがひとつある。先に書いたと



マグダ・タリアフェロ (pf)
WQCC-175 (タワーレコード)



ブランシュ・セルヴァ (pf)
CDRG177 (Malibran-Music)

おり〈リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ引きたち〉の“生みの親”となったセヴラックの親友、彼の最初の伝記作者ともなったブランシュ・セルヴァ（1884-1942）が、あたかもこの曲を録音しているのだ（原 SP 盤の番号は仏 Columbia D15141、年代は 1928～1930 年頃）。手元にある復刻 CD は仏 Malibran-Music 社のもので、番号は〈CDRG177〉。ブランシュ・セルヴァはさすがにこくのある、思いのこもった演奏をしており、案外に良い音で入っもいる。そして、この CD には、たいへんうれしいオマケもついている——というのは、ブックレットにセルヴァの写真が見られるのみならず、その裏表紙には、ほかならぬ「リヴィアのキリスト聖十字架像」が切り抜き写真で載せられているのだ（図1）。実はこの Malibran-Music という個人会社は、パリ有数の古レコード・コレクターとして知られ、世界中の同好の士を相手に通信販売などもしていたギー・デュマゼール氏が経営していたものだった。私は縁あって、このデュマゼール氏とのお付き合いがあり、一度はパリのお住まいを訪ねたこともある。温厚で奥行きのある情操豊かな御仁とお見受けしたが、その人も今は亡い。この貴重な復刻盤を手にとるたび、「ありがとう、ムッシュ・デュマゼール」とつぶやく私である。

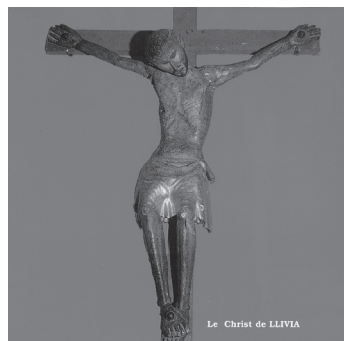


図1

リレー連載

セヴラックと私

久保春代

私が初めてセヴラックの作品を演奏したのは、留学していたフィンランドでのデビューリサイタルの時です。シベリウスアカデミーに留学し館野泉先生の元で勉強していた私は卒業試験で最優秀の成績を頂くことが出来たので、アカデミー主催でデビューリサイタルを開催して頂けたのです。その時に、館野先生が作って下さったプログラムはコーブランド：変奏曲、シューマン：幻想曲、セヴラック：〈リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ引きたち〉と〈ラバ引きたちの帰還〉（組曲《セルダーニャ》より）、ラヴェル：組曲《クーブランの墓》というものでした。今でも素敵なプログラムだなと思います。当時はそれまでに勉強していた大好きな曲に加え、選んで下さったセヴラックの曲が初めて出会ったにもかかわらず、すぐに気に入って夢中になって練習しました。特に〈リヴィア〜〉の方は弾いているとすぐに胸が熱くなってきて、練習がもどかしく感じられたことが懐かしく思い出されます。この時からセヴラックは私の中で特別な作曲家になりました。

2000年の夏（まだセヴラック協会が出来る前です）、ヘルシンキの館野先生のお宅をお訪ねした時の帰り際、先生が「これから僕が一番好きな作曲家の生地に行くんだよ。誰だかわかる？」とおっしゃられました。私の頭をスッとセヴラックがよぎりましたが、先生にとっての大切な作曲家を間違えてはいけない等と生徒魂（？）が邪魔をして口ごもっていましたら「セヴラックだよ！」と嬉しそうに教えてくれました。ああやっぱり〜と納得、きっとこれからはたくさんの曲を先生の演奏で聴かせて頂けそうとうれしい予感がしてお宅を後にしました。

その翌年から音楽之友社・セヴラックピアノ作品集出版にあたり、編集の仕事をさせて頂きました。ピアノを弾かずに資料の楽譜と睨めっこをする毎日が続きました。楽譜を綺麗にきちんと仕上げようという視点で見ていると、スラーやアーティキュレーションなどの書き込みが不完全のように見えてきました。スラーを書き忘れたのか、省略したのか、あえて書いていないのか等思いを巡らし悩んでいる内に、それはセヴラックにとっていつも同じである必要のない、いろいろな可能性のある自由なものなのだろうと気付きました。

2003年にセヴラック協会が出来た年の夏に家族でフランスに旅行し、セヴラックが晩年を過ごしたセレに行ってみました。かつて過酷な歴史を経験したことに想いを馳せ

るのすら難しい、軽井沢を思わせる美しい別荘地のような町でした。石の建物に当たる明るい太陽の光や、噴水の水の輝き、高原の空気にふっとセヴラックの音が聴こえてきた気がしました。

そしてセヴラック協会の例会では毎回、セヴラックの作品のみならずそこから自由に広がったたくさんの曲や話を聞かせて頂き（特に濱田先生のサルダーナの話や、末吉先生の突然曲を中断するように教会の鐘が聞こえてくるという話等、目から鱗でした）、また時には聴いて頂き、自分の中でさらにセヴラックが成長し続けています。

今振り返ると、デビューリサイタルで弾いたセヴラックはロマン派真ただ中のような演奏で、消しゴムで消してしまいたい思いです。今はもっと日常の素朴な心持ちとして弾きたい、なんて思っています。



第18回例会の報告

鎌田和夫

9月21日から10月12日まで新宿の大久保病院に入院しておりました。昨年からの持病の不整脈による血栓が心臓から脳に飛び、脳梗塞を発症したのです。幸い後遺症は軽くて済んだのですが、それでも簡単な文字の忘れやワープロが打たなくなっていました。ショックでした。

心臓にカテーテルを差し込んで4時間近い手術を行ったようです。その間、眠っていましたから判りません。今は薬漬けです。

ビールが一本だけ許されました。ああこんなはずではなかった。なんとも哀しい。やはりもう少し呑めるようにしなければならぬと思っています。そこで、ちょっと変な詩を。

白い杖

鎌田和夫

白い杖をつき
黄泉の国へ

そこは茫漠とした

白い砂の続く

光景であった

まるで自分が

月にただずむ

亡霊のように

浮遊していた

あのカグヤ姫のいる

優雅な世界ではない

ところが

地上に戻ってみても

少しも変わらぬ

おかしい社会が

当たり前に残り

何処へ行けばいいのか

困ってしまった

ところが

地上には我家があり

家族や友人がいて

風呂があつて

酒がある

白い杖をつき

颯爽と出掛けゆく

なにが遭つても構わぬ

どうせ死んだ身の

抜け殻がゆく

逢瀬を楽しみながら

好きな酒を呑みつつ

ノラリクラリとありたい

黄泉の世界も

現世も

そう変わらないだろう

もう少し今に

いたいのだけれど

許されるだろうか

白い杖はいらぬ

二本の足で

歩みゆく

第 18 回例会の報告のその日は、晴天でムシムシする一日でありました。27 度の真夏日。しかし、例会の会場は何時もの通り静かな緊張感が漲っていました。

そうして恒例になりました 1909 年に完成したセヴラックの歌劇《風車の心》第 2 幕第 1 場よりがはじまります。

ブドウ畑とヒマワリ畑の広がる小高い山の連なりに、空井戸が風に吹かれてピュール、ピュールとなっていました。

マリー役の森朱美さんのソプラノとジャック役の鎌田直純さんのバスの声が響きます。久保春代さんと末吉保雄先生のピアノ連弾による楽しい幕開けです。

夕方の薄暮れないの日。フクロウの鳴き声が聞こえて来ます。今日はブドウの収穫祭。ブドウ畑の回りには一頻りお洒落を決め込んで来た老若男女の踊りが披露されています。末吉先生が行進曲風に弾かれました。

マリーは昔の恋人ジャックに会える。会いたい。前奏曲風に震えるようなピアノの音は、トボトボと赤ちゃんが風に吹かれて進んでいるような気がいたしました。すでに酩酊しているのか赤ら顔の男が太っちょ女と踊ってる。リズムカルに速く、輪が広がって、どこまでも続くのです。

私が愛しているのはジャックだという思いにマリーは突き進んでいきます。若き日にジャックと誓い合った甘き苦悩の深さ。恋に再び燃え盛るマリー。ジャックは、この光を、この喜びを、死に行くしかないと感じている。

休憩をはさんでセヴラック《即興曲第 2 番》を華麗さを増して来た平原あゆみさんのピアノで。その印象を詩に。

草原をよぎってゆく風は よろこびの風 哀しみの風 怒りの風	風が風いでしまわないよう 風を起こそうではないか ほら風が回る くるくる回る どこまでも回る クルクル回転する どこまでも回転する	草原をよぎってゆく風は どこまでも よろこびの風 哀しみの風 怒りの風	風が風いでしまってもいい そんなことは関係ない	鎌田和夫
----------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------	----------------------------	------

最後に館野泉先生のピアノと柴田暦さんの詩の朗読で、塩見允枝子さんの《アステリスタの肖像》。「この曲は世界の初演です。今日は試演となります。拳骨で叩きます。ストレス解消になりますね」。冗談づきの館野先生らしいユーモアがいっぱいの言葉でした。全くその通りになりました。それを詩に。

星と星のぶつかりあい

鎌田和夫

星と星が

ぶつかり合う音

ホウキー星たちの

ぶつかり合い

星屑のキラメキ

眩く星たち

雪の血小板のような音

形のない音

姿のない音

とりとめのない音

すっかり音力を

失った星たち

ながれ逝く

やはり影を

失ってしまった音

乱れた星たちは

どこへ行くのだろうか

乱打される

星屑の数々の

その音だけが

響いてくる

星と星の

ぶつかり合い

この世の終わるか

セヴラック通信 第13号 2012 後期 日本セヴラック協会 会報

2012年12月9日発行

発行: 日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリース・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局: 松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先: 亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本: フェデックス・キンコース・ジャパン

